新夫婦日記（六）

佐々木邦

『來たには來たけれど、幸ひ留守だつたもんだから、命拾ひをした。上り込まれたが最後あの男には實に閉ませられる。あんなに凝り固まつてゐちやあねいの。――しまひにやお祈りまでしたらう？』

『さあ、其お祈りで先生大滑稽を演じて行つた。大將妙な癖で、そこでどか然るにとかと抑揚をつける毎に後すざりをする。一體なら膝を進めるところだが、そこは飽を押す國の宗教を信じてゐる男だから、矢張りあれが本式なんだらう。僕のところの二階はあの通り梯子段を上ると直に座敷になつてゐるので、紫人傳道師最後には梯子段の降り口まで退却してしまつた。僕も御交際で先方が退く度毎に進むだものと想像してゐれ給へ。しかし一切夢中になつてゐるから、そんなことには殆んど無頓着で、これから聖書を讀んでお祈りを致しませうと來た。仕方がない、何でも勝手にしろと諦めてゐると、愛する者よ、互に相愛せよ……といふところを朗讀して、祈りますと言つたから、僕も敬意を表する積りで、目を閉ぢて頭を下げた。すると忽ちドターン、ズシーンといふ物音がした。占めた！と思つて立ち上ると、ハヨネは最う梯子段を仰向けさまに轉げ落ちて、うーんと唸つてゐた』

『到頭落ちたか！僕も最う落ちるか最う落ちるかと思つて待つてゐた。其奴あ嘸面白かつたらう』

『面白いどころか、僕は氣の毒で〳〵、妙と二人で頭りに介抱したが矢ッ張り神の恩惠なんだらうあの勾配の急な梯子から落ちても頭に三ッ瘤を拵へたばかりだつたその瘤だらけな頭を抑へながら、かくして僕の不注意を戒め給ふが故に有難く感謝致しますると言つて祈つてゐたよ。さうして僕の下駄を穿き違へてビッコを引きながら歸つて行つた』

『それはイヨ〳〵振つて居る。しかし君も隨分人が悪いねい、落ちるのを待つてゐたなんかは』

『いや決して然さういふ次第ぢやないよ。この勢で行くと案外早く落ちるかも知れないくらいの豫想はしたけれど、眞逆あゝ旨く落ちやうとは思はなかつた』

『田所と社長とは正反對だね。社長は又話がはづむと無暗に乘出して來るから、ウッカリ議論でも始めやうものなら、敷居の外へ押出されてしまふ。いつだつたか、勞働問題で大氣焔を吐いて、終には僕を火鉢で壁へ押付けてしまつたことがある』

『其奴あ田所と好い合棒だ』

『二人で談話をさせるなら、座敷を二ッ三ッ明け通さなけりやなるまい』

『危なくて二階ぢや迎も談話が出來まいて』

『圓テーブルの周圍にでも差向ひで坐らせたら、二人で一日グルグル廻つてるだらう。ハッハ、、』

『ハッハ、、』

『大層お賑やかでございますね。又私達の悪口を言つていらつしやいますの？』

と綾子が入つて來た。

『今日は悪口じやない。お前達は感心だといふ話をして居たところだ』

『何をそんなに感心なすつたの？』

『いや、まあ、こんなにお茶をこぼして――あなたコボしつ放しぢや困るわ』

『僕ぢやないよ、日高君がこぼしたんだよ』

『日高さんがおこぼしになるものですか。日高さんはこゝにチャンと坐つてゐなさるもの、あなたと違つてお行儀よく』

『何、日高君がお行儀が好いもんか。今お前の足音が聞えたもんだから、慌て坐り直したところだあね』

『然う素ッ破抜かれちゃ仕方がない』

と日高君は兜をぬいで、正直にあぐらをかき直した。綾子は笑ひながら襟を拭いて、ちらりと妙な目をさせをした。大方また後で小言をいふ積りなんだらう。

『お茶を零した頃、日高君はこゝに坐つてゐたんだが、談話のはづみに從つて、そこまで下つて行つたんだ。パプテズマのヨハネが云つては居去り、駱駝の毛衣を着て云つては居去り……』

『しまひにお二階から轉げ落ちたのですか。田所さんぢやあるまいし。今妙さんから田所さんのお話を聞いて大笑ひをして參りました。あんな正直なお方にそんないたづらをなすつて、日高さんも餘っぽど程お人が悪くなりましたね』

『へい、友達が友達ですからなあ』

と日高君は巧いところで仇を討つた。

編輯後記

◇第八號は御覽の通りに出來上りました。木公、三叉草二氏の寄稿で大いに興味が加はりました。二氏ともこれから續いて毎號執筆して下さる事になつて居ります。來月號を何うかお待ち下さい。

◇開拓時代物語は、たしかに本誌の一異彩であると自信して居ります。まだ未發表のまゝになつた特輯です

◇排日の歴史が近く本誌に發表されます。原稿用紙にして數百枚が已に某氏から寄せられました。

◇本誌を保管されて居られる方が相當に多いのでそれ等の方々の爲めに本社では、實費で製本してあげます。一年の終りにでもお持參下さい。

◇本社から出版された『二千圓圓で出來る世界一週三等旅行』は非常な歡迎で係の者はマゴ〳〵して居ります。今月中は定價の半額七十五仙です、早く御申込下さい

Vol. 1 No. 8　THE TAIRIKU　SUPPLEMENT TO THE TAIRIKU NIPPO　1931 November 25th

隔週大陸

（第八號）
大陸日報附錄
編輯人　山崎寧

苦闘十二年の回顧【五】

出征より參政權獲得まで

二十二日午後に至つて、陸軍次官から、英國政府より回答があつたと云ふ通知があつたが、その通知と云ふのは英政府は日本人の軍務に服すると云ふ事は喜んで承認すると云ふのであつたから、直ぐに陸軍省に出頭すると次官は加奈陀當局としては日本人の獨立部隊を編成するには第一に、大隊敗千百名の兵員が募集出來るか否かに大戰中之が補充兵員を漁獵する見込があるかを確めなくてはならぬ、若し兵員敗が出來ると云ふなら許可の命令を發しやうが何うかとの質問に接し、自分は茫ぜ返答に窮したが、そこで確に出來るとの斷言も出來兼ねたので、『それは即答し兼ねる』旨を答へた。すると政府としては斯ん云ふ事情の存在を知りつゝ獨立部隊の許可を與へる事は困難だとの事で遺憾とは思つたが一存にも決し兼ねたので仕方なかつた。依つて廿四日オタワを引上げキャルガリーへ向つた。

日本人會としてはキャルガリーの第十三軍管區司令官クルックシャンク少將にも交渉して居る事もあつたので、先方では私の歸るのを待つて居た樣な次第で廿八日午前十一時に同少將を訪問した所

當軍管區ではオタワ政府が反對でない以上一中隊の日本人を採用する事は、參謀會議で決定を見たから、一應明朝電報でオタワ政府に問合して確答しやうとの事で返電を日本人會の方へ打電して貰ふ事に約束して歸晩した次第、一中隊の兵員數は二百廿七名であると云ふ事だつた

遂に解團を通告

スタンレー・パークに於て、或は、知己たるキッチナー元帥に打はバウエル運動場に於て、教練を電して、日本人義勇兵一中隊の採重ねた日本人義勇兵は、いまは完用を願ひ出たのが翌六日であつた全なる軍人となり切つて居た、が、これも又力とはならず、然しオタワよりの返事はまだ來ない、このまゝ解團して、四方に散じてコフーン大尉も困じ果てゝ居た、仕舞つては、或は吉報を得たるの五月五日午前十時、キャルガリーの際甚だ困ると云ふので、義勇兵團のクルックシャンク少將よりは は『日本人義勇團』と改稱して事參謀本部より日本人義勇兵採用務所をアレキサンダー街二四〇に編入の件は目下の所一時見合すべしとの内訓ありたりと云ふ電報が日會へ到着したので あつた。頼みにして居た綱は、これで全く切れて仕舞つた。日會の努力も、これで水泡に歸して仕舞つた。己むなく日會は憾みを飲んで解團に決定し、山崎會長は即日此の旨カドバ・ホールに至つて義勇兵諸君に通告したのであつた。

日會からの此の通告に、失望したのは義勇兵諸君許りではなかつた。あらゆる努力を續けて來た、在留同胞を始めとして、過去數ケ月を、彼等と共に寝食を共にしたコフーン大尉以下教官も、共に殘念がつた、だが然し政府の命令はこれを何うする事も出來なかつた己むなくコフーン大尉は一同を集めて別辭を交はし、なほ時の來るのを待つ樣にと慰めたのであつた

コフーン大尉から、日本人義勇兵團の解散を耳にした同氏の父君は、知己たるキッチナー元帥に打電して、日本人義勇兵一中隊の採用を願ひ出たのが翌六日であつたが、これも又力とはならず、然しこのまゝ解團して、四方に散じて仕舞つては、或は吉報を得たるの際甚だ困ると云ふので、義勇兵團は『日本人義勇團』と改稱して事務所をアレキサンダー街二四〇に置き、こゝに再び團体を結んだのであつた。そこで政府は、今迄の努力に對して、功勞章を授與する事となり、五月十一日午後二時、カドバ・ホールに於て、これが授與式を擧行し、

大英國に捧げられたる功勞を認めこゝに表彰す

一九一六年　カナダ

と記された徽章を胸に、義勇兵及關係者一同は、記念の撮影をして互に無事を祈りながら別れたのであつた。

ブレーモアーよりの吉報

此れだけで終つたなら、主唱者たる日會も甚だ面目がたゝないわけであるが、解團してから十八日目、五月廿九日、ロッキーを越へたアルバタ州フアーネーに近いブレーモアー市民募兵協會幹事ジェー・ビー・ハルム氏より一中隊の日本人義勇兵團に參加を希望して來たのであつた。更に六月六日同じブレーモア百九十二大隊長ライオン中佐より『日本人の入隊に就て政府より承認を得た』と入電、日會としては、既に多くの團員が地方に散じた後の事なので、その返答に窮して居たが、七日になつて中尉クラフトン氏の出晩があり、こゝに於て再び活動を開始し、日本人義勇團員のアルバータ州行となつて來た。

快報は續々と入つて來た。五月廿五日スイフトカーレント歩兵二百九大隊に參加した三名の日本人の出征を最初にして、メヂシンハット騎兵第十三大隊と共に二十五名（出征間際に四十二名となつた）の同胞出征、マクラウドの軍隊へ入隊等々、再び日本人社會は緊張を加へて來た。

此の時、漸きかへるメヂシンハットの市民に送られながら、六月二十二日午前九時同地を出發出征の途についた、義勇團員を代表して熊川郁、村上昇、志賀貞吉三氏の名で左の如き告別の辭を送つて來たのであつた。

歐洲の戰止みて幾年、然もなほこの告別の辭に目を落とすの時、我等はなほ、赤きポピーと共に遠き歐洲の野に眠る英靈を思ひ出さるゝを得ないのである

コドモノページ

國際聯盟とは何？

さア勉強致しませう

美智雄

みなさんは、今、日本と支那が『滿州事變のため、こた〳〵してゐるのをご存じでせう。さうしてそのために、ジュネーヴに開かれてゐた國際聯盟の總會でそこに集まつてゐたイギリスのセシル卿だのスペインのレルー氏だのフランスのブリアン氏だの、事務總長のドラモンド卿だのといふ各國の代表が、日本と支那との間のごたごたを、もしこのまゝ放つておいて戰爭でもはじめたら大變だといふので、どうしたら平和に仲直りをさせることが出來るかと、日本の代表の芳澤大使や支那の代表の施肇基（シチヤオチとよむ）といふ公使も一しよに入れていろいろと議論したが、まだ議論がまとまらず、よい智慧も出ないでゐるのをご存じでせう。――ところでその、日本と支那とのごた〳〵を仲直りさせようとしてゐる『國際聯盟』といふのは、一體どういふものなのか、みなさん、知つてゐますか？　けふはその話をしませう。

みなさんはよくお友達とケンカをするでせう。さうしてお互に顏や手をひつかいたり頭をたゝき合つたりして、あとでヒリヒリして痛かつたり頭にコブが出來たりして困るでせう。ケンカは本當にいやですね。それと同じやうに、國と國とがケンカをする戰爭といふものゝコワイことも、みなさんは知つてゐるでせう。

あの大正三年から七年まで五年もの間つゞいた、今までゞ一番大きかつた『世界戰爭』には死んだりケガをしたりした兵隊の數が三千三百十五萬人で、日本國中の男の數と殆んど同じだといひます。またその戰爭で使つたお金は七千百五十八億圓で、これだけのお金は、日本の國の政府で使ふお金の四百十年間分だといはれてゐますまた例のパナマ運河は八億圓を使つて掘つたのですが、もし、これだけのお金があればパナマ運河と同じ運河が九百三十も出來るのださうです。――どうですか、みなさん、戰爭といふものはかういふものなのです。けれども、みなさんがケンカをしてゐる間は、痛いことなど氣がつかないやうに、世界戰爭でも戰爭してゐる間はみんな夢中で、少しも氣がつきませんでした。

けれども、たゞ一人、南アフリカのスマッツといふ將軍だけは、戰爭の恐ろしさに氣がついて、これは世界中の各國が力を合せて、もう戰爭はしないといふ申し合せをしなくてはいけない。さうして世界を平和な樂しい所にしようといふことを、しきりに世界の各國にいつてやりました。するとこのスマッツ將軍の言葉に胸をうたれたのが、みなさんも御存じのその時のアメリカの大統領ウィルソンとイギリスのセシル卿だつたのです。この二人は大へんこの言葉に賛成して、さうだ、さうだ、もう戰爭などはしてはいけないと深く考へ、程なくさしもにはげしかつた世界戰爭が終ると、まつさきにウィルソンが『どうです、今度の世界大戰で戰爭といふものが、どんなに恐ろしい、コワいものかといふことが、世界各國にわかつたではありませんか。もう戰爭には世界のどの國もこり〳〵でせう。そこでみんな集まつて、これからは決して各國とも戰爭はしないやうに、力を合はせて行かうではないですか』といひ出したのです。すると、どの國も本當に戰爭は恐ろしいものだといふことに氣がつき、もう戰爭はこり〳〵だと思つてゐた所ですからみんなサンセイ、サンセイと手をあげたのです。

そこで一九一九年――大正八年の二月三日から四月十一日まで、十五回も世界各國から代表が集まつて、いろ〳〵話し合ひ相談し合つた上、廿六ヶ條から出來てゐるかたい約束をつくつて、もう決して戰爭はしない、さうして、もし戰爭しさうな國があつたら、みんなで力を合せて仲直りさせようとかたいかたい約束をしたのです。その約束をした國は全部で五十八ヶ國で、これに入つてゐない國はアメリカ、ロシア、メキシコ、トルコ、エヂプトの六ヶ國だけです――かうして出來たものが『國際聯盟』なのです。そして何といつても五十八ヶ國もの澤山の國が集まつてゐるのですから、お互の便利を計るために、國際聯盟事務局といふものをジュネーヴに作り、その事務總長にイギリスのドラモンド卿をそしてその下に事務次長を四人おいて、いろ〳〵な事務をとらせることにしました。その事務次長の一人に日本の杉村陽太郎博士がなつてゐます。

以上で國際聯盟といふものが、どんなものだかといふことはお分りになつたでせう。この國際聯盟は、毎年九月の第一月曜から、聯盟に入つてゐる各國からの代表が集まつて、いろ〳〵相談することになつてゐるのです。今年も九月の第一月曜の七日からその相談が開かれてゐたところへ、丁度日本と支那とのごた〳〵が起つたのですぐさまみんなは、このごた〳〵の仲直りをさせようと相談したのでした。けれども、いろ〳〵議論が出て、どう〳〵聯盟に入つてゐないアメリカまで引つ張つて來て、相談にのつてもらふようなことになつてしまつたのですが、前にもいつたように、まだほんとうに議論がまとまらないのです。今度のこの相談で議長をつとめたのはアレハンドロ・レルーといふスペインの外務大臣、一番議論の中心になつたのが、フランスの外務大臣のブリアン氏、イギリスのセシル卿などでした。日本の代表の芳澤大使は、日本のため一生懸命で、さういふ人達を向ふに廻して、いろ〳〵と議論を戰はしたのです。

日支紛爭解決に紙上『國際聯盟會議』

是れこそ是非とも備へて置かねばならぬ一冊

横文字で書いた世界の地圖を開いて、新聞で得た知識を土臺に、しきりに考へ込んで居る令子さんが、若しお父さんであり、お母さんである、あなた方に『國際聯盟と云ふのは何處に事務所を持つてゐるんですか、その地圖が挿んであり、エヂプトの風光、パレスタインの歷史などは、でも容易に、世界人に接しながらに、世界の事情を知る事が出來る事は、火を見るよりも明かな事である。この位簡單明瞭に、世界の情勢を說いて居る本は他に求める事は出來ないであらう。

卷頭には歐洲及び米大陸三枚の地圖が挿んであり、エヂプトの風光、パレスタインの歷史などは、

◇氣を附けな

母親『今日お前は學校で、先生に叱られたさうぢやないか。一體どうしたの？』

子供『僕、ヒリッピン群島のあるところを忘れたんだもの…』

母親『だからお母さんが、物をおいたところを忘れちやいけないつて、いつも言つてるぢやないか。』

して事務總長といふのは、何と云ふ人ですか』

そんな質問を持ち出したらまさか頭をカイて居るわけにも參りますまい。

世界がだん〳〵小さくなつて來ると、加奈陀の事を知つてゐるだけでは子を持つ親としては、不足を感じないわけには參りません。では何うしたらよいか？　まさか百科全書を開いて見るわけにも行きますまい。そこで記者は、こんな場合の爲め特に編纂された、としか思はれない程に、實によく出來てゐる、木社發行『二千圓で出來る世界一周三等旅行』記をすべての家庭に推薦致します。

此の書は旅行記と名はつけてあるが、實は世界歷史であり、又同時に世界地理であります。否そればかりではなく、實によくもこれだけを、そしてよくもこんな大人物に、と思はれる程、世界名士の署名を集めた芳名錄であります。

スイスの頁を開いて見ると、國際聯盟に關する說明があり、その事務總長ドラモンド、次長杉村陽太郎氏等の署名が列んで居る。日支紛爭解決に努力しつゝある、松平大使の署名がロンドンの部にあり、佛大統領、米大統領、ムソリニその他百卅名十等、何しろ百二十餘名の國際人が、ズラリと名前を連ねて居る。これだつたら誰にでも容易に、世界人に接しながらに、世界の事情を知る事が出來る事は、火を見るよりも明かな事である。この位簡單明瞭に、世界の情勢を說いて居る本は他に求める事は出來ないであらう。

卷頭には歐洲及び米大陸三枚の地圖が挿んであり、エヂプトの風光、パレスタインの歷史などは、

薄氣味惡い深夜の音

悄然と立つ青年の姿

皇港　木公生

第二十世紀の科學萬能の現代に次の樣な話しをするのは少し時代錯誤かも知れませんが、私達の世界には何かしらん不思議な事實が澤山ある樣に思はれます。昔から幽靈の話しはよく聞かされて居りますが、科學的に敎育された私達の頭には『そんな事は信ぜられない』とも思ひます。が、一面に、やはり人間の知識では了解の出來ない事實もあるかも知れないと云ふ樣な氣もします。これから、します話しは、さつと昔樣も耳にしたことがあると思ひます。が、不思議にも幽靈の話しを聞く時には、ゾッとする樣な、標首に冷水をかけられる樣な氣がするものです。人間の頭の中では、幽靈などはあるものかと否定して居りながら、心の中では『事によつたらあるかも知れないぞ』と云ふ樣な氣があるのではないでせうか。

大正四年五月七日の早曉の事でありました。女子大學英文科の二年生スミ子と云ふ娘が妹のヒロ子と隣合つた室に、境の襖を半分開け放して寢て居りました。ヒロ子がフト夜中に目を覺まして又ウト〳〵として居ると、姉の寢室かタガタする音が聞こて來ました。どうも無理に障子をコヂ開け樣として居る樣な樣子です。ヒロ子は多分姉さんが便所へでも行つたかも知れないと思つて姉の室をのぞいて見ると、靜かに横たつて居て何の變化もありません。ヒロ子は何か急にゾッとして、思はず姉を呼び覺まして、不思議な音の事を話しました。

姉は姉で夢の中に黑い學生服を着て片手に帽子を持ち片手に手袋を提げて悄然として立つて居る若い見覺へのある青年が入つて來るのを見たのです。そしてその青年が自分の床の上に乘つた樣な氣配がして夜具の袖が重くなり、押へ附けられる樣な苦しく感ぜられたと話しました。勿論二人は何か氣味が惡くてそれからは朝まで一睡も出來ませんでした。

この怪しい事件の後家人一同がいろ〳〵取沙汰して居ると、スミ子は『どうもワイさんの樣な氣がする』と云ひ出しました。それで調べて見るとワイ工學士は大學に居た頃、スミ子を戀し、スミ子の母もワイが大變氣に入つて居たので行末を許して居りましたが、カンジンのスミ子は餘り氣が進まぬので北越方面に行つて失戀に泣いて居た青年である事が判明しました。しばらくして、その五月の七日でそれは不思議な姿の現れた日と同じ朝――彼は自殺して果てたといふ便りがあつたのです。失戀と失意の中に彼の萬斛の怨涙が凝つて生靈となり、スミ子の枕頭に現れたのだと、一同この青年に同情を禁ずる事が出來ませんでした

N將軍のことゞも

某青年からの手紙

大正四五年頃のある夜、某青年が猪狩史山氏を訪問してN將軍の事を語り、翌日次の樣な手紙を同氏に送つて來た。此の青年と云ふのは將軍の夫人（書中に所謂エス子）の姉の孫に當る由で、將軍を叔父と呼んでいたさうな。此の手紙は最近猪狩氏によつて發表せれたものである。書中彼とあるのはN將軍の事である。

昨夜はお邪魔致しました。晴れたのは一昨日一日きりで、今日もうつとうしい雨が降つてゐます。昨夜一寸お洩らし致しました事を早速ながら書いてお送り致します。もとよりある筋の方々によつてのみ秘められてゐる事でありますから、其邊は御ふくみ置き下さい。

明治の最後の年の七月二十幾日か、突然私共が驚かされたのは、やんごとない御方の御不豫との報でした。其日彼は早朝に宅を出て鎌倉から沼津に行く筈でありました。それは彼が長をしてゐる院の水泳場が其年、片瀬から沼津に變更されて、しかも其朝院の生徒は水泳練習に出立する豫定だつたからです。彼は其朝實に早く家を出てしまひました。其あとで御不豫との報が發表されたのです、院からは自宅に右の御發表に對して生徒を出發させてもよいかと、主事エム氏から電話で聞き合せてまゐりました。それにの答へはエス子が猶豫でしてしまひました。大意は此御發表を知れば彼は直に歸京致すでせう、生徒の出立は其後の事として、兎に角一應さしひかへさせて下さいとの事でした。女の身として夫の公事に差し出がましい口を聞くのはエス子の本意でもありませんでしたらうけれど、彼の平生の氣質を知る彼女は、此の場合、院の主事や學生監やの當惑思つて、責任をもつたこんな返事をしたのだらうと思ひます。しかしこの處置は實に當を得てゐたのだつたのです。

旅先で號外を見るや彼は直に歸京してきました。そして院の生徒を出立させなかつたのを喜びました。其後は毎日宮の中に參るのが日課でありました。そして御病間近う召されてゐたらしうございます。當時彼は新聞記者などの問ひに答へて『自分如き卑賤の者は御そば近うまゐる事は出來ぬから御消息は知る由もない』と申して居りました。實際彼程の官職の者が御傍近うは參られぬのでありますから、この答へを我も人もうたがひませんでした。しかし何事かの御發表のあつた朝エス子が私に向つて『××樣はね御病室に近くお召しを蒙つてゐらつたらしいよ。御病氣の少しはよろしい時はいゝけれど、一寸でもわるい時は彼の御さげんが惡くて。今日は朝から宅にゐらつしやるけれども、御さげんがわるいので困つてしまうよ』と聲をひそめて居りました。彼女が何故こう云つたか（後に思ひ合せればお身近う云々といふのが事實でありましたが）と云ふのに彼が宮に參る時は朝ともも晩とも決つてはをりませんでした。少しおよろしい時退出して家に眠りにかへる位のものでした。それも床をとつて眠るのではなくソッファによりかゝつてほんのつかれを醫するにすぎなかつたのです。しかし其退出の都度に『少しはおよろしい』とか『今日は言を言ふてあらせられた』とかでく手短くエス子に漏らすのでエス子が想像したのでしたこゝまでは前置き見たやうなものので、別に本文に直接の關係がある譯ではありません。しかしこれ丈け述べて置きましたから以下に云ふ事がはつきりするだらうと思つて述べたのです。

以下は直接僕がエス子から聞いた話でない事は昨夜申上げた通りです。

七月二十九日の夜の事でありました。

やんごとない御方は十五疊の日本間の床の間の方によつて御寢なつてあらせられました。次間との界は唐紙によつて閉ぢられてあつたのでした。其次間に彼は宮の中の極く高い官の方々の群れに混つてつめてゐたのです夜は刻々に更けてゆきましたが四圍はひつそりとして、お上間は如何あらせられるか、お次に侍ふものには知る由もありませんでした。十時頃でもありましたらうか、御あとがねのお方の低聲が漏れると衣ずれの音が御上間から御入側にこぼれたのでした。其音は次間の入側に止まつて、其處から次間に入つて來ました。それは一人の女房で彼を召されたのでした。彼は御入側の方より御上間に入つて御病床の御褥に平伏しました。御枕邊には御あどがねのお方、それよりやゝ下手にみこがあらせられたと承はります。御褥邊の方には女みこ達、女房侍醫等がむらがり。猶御枕邊の方によつてさわらびとか召された局があられたやの事です。彼が御褥邊ににじり入つて平伏した時、みこは御手にて御病床の御胸のあたりをさゝれ、これへ進めの御會釋をたまはりました。それでもかれは其儘にして居りましたするとあどがねの御方が『××近う』との御言葉を賜はりました。彼はそれでも動きませんでした。又『×〻近う』と召されました。彼は猶進みませんでした。三度御方より『×。近う』と召されたので彼は御胸のあたり迄膝行しました。そしておそる〻〻御顏を拜せば、わづかに御息の漏れるのみでおやつれも拜されたとの事でした。彼は元の位置ににじりかへりました。あまりの恐れ多さに其場にぴれ伏してしまひました。それから幾何時が經つたか、十一時四十分頃になると、ひれ伏した彼の

（以下三面へつゞく）

開拓時代物語

ステヴストンの卷（八）

食料を斷たれ、家を追ひ出されてはたまつたものではない、そこで晩香坡の白人商店からは日本人漁者の爲めにポテトー千俵に、千人を收容する事の出來るテントを送つて來ると云ふ狀態で、白人側の方も同樣の供給を受けたのであるが、日本人は一時も米がなくては生きて行かれない、と云ふ報告に接したので左の樣な一文を發表したのであつた

吾等の兄弟よ！

向ふ一ケ月の間、諸君は葛藤を排して魚を食つてはしい。そして此の魚は出來得る限り日本人から買ふ事を希望する。何故ならば彼等は此の金によつて米を買ふのである。彼等日本人は米がなくては一時も生きられぬと云ふからである。かくてキャナリーの不當なる食料攻めに對抗せよ！

ストライカーの大行列

斯うして互にもみ合つて居る間に、判事ジエー・エー・ラッセル氏によつて開かれた裁判に於て、證據不充分で無罪放免となつたアンダーソンは、その翌十四日ポート・ジンプソンから來援した土人の繼隊を先頭に立て、社會主義者で勞働黨代議士候補に打つて出たマクレーンを次に自らもその行列に加はつて

カドバ——メーン——ヘステングス——キャロル——カドバ——キャンビー

を經てコートハウスへとストライカーの行列は進んだのであつた。當時のコートハウスは、ヘステングスとキャンビー街の角にあつたが、こゝは人の黑山を築き、ジョー・マーテン及び土人の會長であつたケリーは、珍らしくも雄辯を揮つて、非常なる喝采を受けたのであつた。

行列に加はつた人々のうちにはオールを持つもの、『出漁か二十五仙か、正義を求む』などゝ書いた旗を持つものなどあつて、夜の事ではあつたが、沿道又人の山をなして居た。かくて彼等は寄附金を集め、ブレッドやポテトーの寄贈を求めるなどして、三百餘弗を手にする事が出來、行列の成功を祝し合つたのである。

軍隊の出動

以上記述した所、その順序に多少前後した點はあるが、要するに日本人側が、將來の計を樹てゝ進み出やうとして、白人側との提携を斷つ旨宣言するまでは、共同線戰に立つて居た事、前記の事實によつて讀者諸君にも了解出來るであらう。

たゞ此處で將來の爲めにも特に述べて置かなくてはならぬ事は、日本人がストライキ・ブレーカーの汚名を負ふべき地位に置かるべきでない、と云ふ事である。當時の漁季の關係その他からして、到底キャナリーが、二十五仙を支拂ふ事の不可能は明瞭であつた。十五仙の發表に對して、二十仙を主張し、あらゆる危險を冒してまでも出漁した結果は、完全に同胞の勝利となり、今日ステヴストンが同胞多數の在留地として存在して居る所以を作つた事を想像する時に、苦き經驗の中に織り込まれて居た將來の計に對して、今日感謝すべき多くのものを持つであらう。

愈〻日本人側は、出漁の日を翌日に控へた七月二十三日午後二時全同胞は廣々とした野の中に集會し、二三の團體幹事が、破れ箱の上に起つて、あらん限りの聲を張り上げながら、激勵演說をすると同時に、如何なる方法に於て、白人側よりの暴行に對抗するか、を敎へたのであつた。勿論白人側に於ても、僅かの距離の廣場に集合して同じ樣な演說をして、盛んに氣勢を擧げて居たのであつた。

演說が終り、對抗方法が講ぜられると、三千の日本人は、帝國の萬歲を三唱し、終つて隊伍堂々、示威行列をなし、ステヴストンの漁村を端から端まで練り歩いたのであつた。

何しろ當時は、今日の樣に警察の制度があつたわけではないから漁者團體は自ら警察權を持つて、苟も團員中に不都合なものがあつた場合、幹部の前に引き出し、幹部自ら裁判官となつて、放逐又は罰金刑を科するのであつた。此の騷ぎの中で

『俺たちは日清戰爭で生死の間をくゞつて來た、この國まで來てまた同じ樣な危險の中に入りたくない』

と出漁に反對するものがあり、これに導かれて約四十名の者が、同樣な申出をなしたので、直に彼クトリアの州政府に打電して、軍等の或者はステヴストンより放逐隊の出動を求めたのであつた。

それは一人として希望者がない、山崎理事は致し方なく、自ら武裝して此の任についたのであつた。

此の樣な形勢を見てとつたキャナリーは、これは到底警察——と云つても署長と補助の巡査二人ぎりのものであつた——だけの力では何うにもならない、と知つてビクトリアの州政府に打電して、軍隊の出動を求めたのであつた。

それは一人の女房で彼を召されたのでした。彼は御入側の方より御上間に入つて御病床の御褥に平伏しました。御枕邊には御あどがねのお方、それよりやゝ下手にみこがあらせられたと承はります。御褥邊の方には女みこ達、女房侍醫等がむらがり。猶御枕邊の方によつてさわらびとか召された局があられたやの事です。彼が御褥邊ににじり入つて平伏した時、みこは御手にて御病床の御胸のあたりをさゝれ、これへ進めの御會釋をたまはりました。それでもかれは其儘にして居りましたするとあどがねの御方が『×〻近う』との御言葉を賜はりました。彼はそれでも動きませんでした。又『×〻近う』と召されました。彼は猶進みませんでした。三度御方より『×。近う』と召されたので彼は御胸のあたり迄膝行しました。そしておそる〻〻御顏を拜せば、わづかに御息の漏れるのみでおやつれも拜されたとの事でした。彼は元の位置ににじりかへりました。あまりの恐れ多さに其場にぴれ伏してしまひました。それから幾何時が經つたか、十一時四十分頃になると、ひれ伏した彼の

（以下三面へつゞく）

開拓時代ナンセンス（二）

三又草

今から廿五年ばかり前ビクトリア市には、日本人は僅かな敗しか居なかつたが、市中の働きや田舎の勞働をしつゝ此處大沼旅館を根城にして居たバイオニヤー等の中の一人、日本から來て間も無いる年の秋ゴールデン・ヘッドの山々は紅葉して海岸のオルダーの葉がサラ〳〵と音を立てゝ散る頃であつた。大沼旅館へ一白人がボーイを雇ひに來た。多く居る先輩諸君はあそこへはイヤだと誰一人行かうと言ふ者も無い。併し新米の彼れに大沼屋のオヤジ（宿主は皆そう呼んだ）が言ひ付けた

『ユー行つて辛抱して來い、一日働けば日本金一圓二十錢になる、日本に居れば蹴飛ばされ奴が、仕事がハードだの、給金が少いのと贅澤並べる奴等一生涯日本行きは出來ねー、お前一辛抱して來ねーか』

彼れは勿論言葉は分らないし土地不案内ではあるが、仕事に贅澤を言ふ程にスレッカラして居なかつた。一日どんな辛い働きをするにしても、一圓二十錢は剛氣だと考へた。

『オヤジさん、ワシ言葉何も知らんでもよからうか』

『ウン、ケトーのオヤジが手まねで教へるから其通りすれば好い、ナーニ、一ケ月も居れば便ひ料位は唐人語を覺えるサ』

大沼屋のオヤジは親切に一揃ひのキャンプ道具、食料などを作つて、二頭立ての馬車で市の郊外六七哩の一白人農家へ送り付けて呉れた。チキン小屋の古いのに先づ巣を定めた。翌朝七時には已に白人主人はバイブをくわへ乍ら開墾地へ出て居る。主人より遲れてはと早速仕事場に行つて主人が何だか唐人語で話すけれど、サッパリ分らぬが何でも道具を與へたり手真似を見ると株を掘れと言ふのらしいので一生懸命に掘つた。主人もとても働く男で朝七時に仕事にかゝると十二時迄タバコをノベッにすひ乍ら、ノベッに働くのには感心した。彼れが一寸でも腰を伸ばして骨休みすると、主人がすぐ眼を光らしてハリアップ〳〵と言ふ。何でも休むなと言ふ事らしいので一生懸命働いた。日本でユックリ腰を下してタバコ休みし乍ら働いた彼れには、一日の緩みない勞働にはヒドク勞れた。後で聞いたのだが此の家は餘りボーイを酷使するので大抵なボーイは二日目には必ず逃げ出したそうである。

茲に二日目の午前大事件が突發した。と言ふのは前日の疲勞にも屈せず日本金一圓二十錢の爲めに勇敢不撓孜々として働いて居た彼れ、主人もコヤッは辛抱すると思つて居たらしい。午前九時頃だつた彼れは大便が頻りに催して來たので、主人に便所へ行くと言へないので自分のお臀をポン〳〵たゝいて道具を投げ捨て急いで歸りかけた。スルト主人は急に彼れを追ひかけて引捕へ、無理にマテキを持たせて何だかしきりに嘸語見たいな事を言ふ。併し彼れは前夜主人のオカミさんが搾り立ての牛乳を澤山呉れたので、日本では半分は米のトギ汁を入れたやうな牛乳一合十二錢也でとても貧乏人の口には入らぬ。流石アメリカだ、牛乳が水代りに呑めると、實は一時に元氣になるつもりで半ギャロン程のミルクを平げてしまつたので元來腸の弱い彼れは、スッカリ今朝からビー〳〵ドン〳〵の御祭り騒ぎとなつた譯だが、主人にそれを通ずる事が出來ない。だが仕事を續ける事は尚更出來ない。便通頻りに催して彼れの言葉其まゝでいへば將にタレカブリそうになつて、主人を押除け走り出すと、それとは知らぬ主人は又逃げ出すかとばかり追ひかけて引き戻す、彼れが顏をしかめてウンコ〳〵と日本語でいひ乍ら臀をたゝけば主人もゴッ……何とかこれも面を歪めて引き止める、下腹がキリ、つと張る。もう絶体絶命、どうにも耐へられなくなつて兩手で自分のお臀をかゝへ顏をしかめて地團駄ふと、女みこ達の御しのび音となつたのです。女房は彼れに次間に退れと示されました、彼れは御次間に下つて自分の席につきました。界の御唐紙は開かれてやんごとない方の神隱れましたのが告げられたのでした。

事實はわづかこれ丈けにすぎません。しかし宮の中の重い臣さへ侍ることの出來ぬ御席に召されたといふ事は彼の決心をぞれだけ固めしめたでせうか。想像にかたくないと思ひます。この破格の寵遇が孔明は昭烈の三顧の知遇よりも、もつと〳〵深い恩遇を彼に感せしめたでせう。僕等にしてもが卑賤なる官職の者が、かく迄の御恩遇を賜はつた辱なさは只々感激の外ありません。エス子の死が僅々の動機があるにせよ、單に夫に殉じたのみでない事は明かに知ることが出來るだらうと思ひます。僕はこれで筆を止めます。事實はこれだけに過ぎないのでありますから、ある時機のきます迄くれ〳〵も秘して下さいました。僕が之れをお漏らしましたのは僕の心に期する事があるからです。永久に墓の底に持つて行くには少しおしい事實のやうに思はれるからです。

加奈陀同胞
發展秘錄
特價金廿五仙
殘り數部あり右の特價でお頒ち致します

（二面より續く）

耳に入つたのは四邊のざわめき

奉天城の思ひ出

玉座の腰掛賃十五錢也

X Y Z

波の樣にうねつている滿洲平原の物凄が、霧の樣に吹きまくられて、奉天停車場前の廣場には、鼠一ピキ姿を見せない。

『此の分ちや當分續きませう、何んと云つても一月ですからね』

顰眉は斯う云つて、毛皮外套の襟をたてた。やかましい音をたてゝ鐵道馬車が走つて行つた。

『何うです、大東京の遺物が、こんな所で見られ樣とは思はなかつたでせう、ありア東京から持つて來た、十九世紀の文明ですよアッハ〳〵……』

迎ひに來てくれたワイ氏が、今過ぎ去つた鐵道馬車を指して云つた。日本にとつては十九世紀の文明の遺物であつても此處では二十世紀の華であつた。悠長な支那人の生活には、然しふさわしいものであらう。

日本が世界人に呼びかけて居る發明は人力車である、が支那に輸入されたものには、かなりな手が加へられて、車体がぐつと低くなつて居る。眼に見える前方の景色は、右と左へのみ動いて居る將棋の、餘りに太つても居ない筋肉だけである。

停車場のドアーを開けると、ドッと駈け寄つて來る人影が五ッ六ッ、それは支那人の人力車夫であつた。

『旦那安い〳〵』

◇

支那語と云へば快々的と漫々的それにニヤだけしか知らない私であつた。案内役にたつて臭れたワイ氏の車を後に、奉天城參觀に出かけたものである。凍る樣に足がつめたい。

停車場を離れると、高層な煉瓦の建物が列んでゐる。多くの日本人はこゝで支那人相手の商賣をしてゐるのである。

次色の城廓を入ると、全く支那人街になつて、すべてがその趣を變へて來てゐる。何んでも赤でさへあれば〳〵支那、到る處の板塀にべた〳〵貼られてゐるビラ、大道の眞中で、ぶつ〳〵煮へて居る豚の臓物、――そして此の大釜の周圍に蠅の樣にたかつてゐる苦力、支那でなくては見られない圖だ。

凄い黄色の顏が、ごつちやがへつて居る中を、わける樣にして車は進んで行く。ふりかへつて見れば、ワイ氏の車は、何處を何う迷つて居るのか姿が見えない

『ニヤ、マン〳〵デー』

◇

車はぴたりとまつた。振りかへつた車夫は、このお客支那語が話せると見て、素晴らしい早口でしやべりたてたものである。こうなれば手をふるより外に方法はなかつた。

大道の眞ン中で車がとまつたのであるから騒ぎは大きい。後からも前からも、交通整理のやり樣もない程に押しかけて來る通行人がチャウ〳〵チャウ〳〵――そんな樣な音調でわめきたてるのであるから車夫君もすつかりうろたへて

『旦那行くい〳〵』

◇

『やア居た〳〵。此の車夫の奴は一寸も動かないんだよ、それにしても君の方は早かつたなア』

極樂でエンマさまに會つた樣な嬉しさだ。

◇

日露戰爭でいためられた城壁は未だそのまゝになつて居る。北滿の大將張作霖の居城だとさけば、だらりと下向に生へた髯の男が、カーキーの洋服の下につゝしたサーベルを握つて出て來るのも不思議ではない。車を門前でとめると歩哨が身分證明を要求する。嚴めしい顏――さう云ひたいのだが、支那人の顏には求めても得られないものゝ一つだ。

◇

何處を何う歩いたのか記憶は薄い。案内人が清朝時代の贅澤な暮し振りを、わけのわからない日本語で話してくれる。

金塗の椅子の前に來ると彼はぴつたりとまつた。掛けて見ろ、と云ふのだ。玉座である。太祖高皇帝になつたつもりで、どつかりと一段高い玉座の椅子に腰をおろすと十五錢くれと云ふ。三日天下が支那將軍の通例であるなら、一日の皇帝氣分が十五錢で出來るのであれば高くもない。金が明日の王を約束する支那式はこゝにもある

◇

外に出ると、そこは廣場だ。張作霖の兵隊さんが教練をやつて居る。何んのまじないか、馬と云ふ馬の尾には、赤や黄色の布が結ばひつけてある。眞直になつたり、曲つたり、と思ふと

『チーン』

手鼻をかんでゐる。これがやがて支那を一手に引受け樣と云ふ、將軍閣下の卵である。

◇

手鼻と士氣――そこに何の關係はなくても、もう十年にもなる昔見た、アノ奉天城内の教練を、思ひ出さずには居られないのである

亡國的な音調だ。先頭にたつたラッパ手は、頬をふくらまして吹いて居る。だが何んと張合のない事よ。まるで河馬のアグビだ。

◇

滿洲はいま多忙である。殊に奉天を中心として、日支の間には、いつ解決するとも知れない雲がたなびいて居る。

『支那の兵隊は鐵砲が打てる樣になると馬賊になるんだからね、やりきれりアしないよ』

ワイ氏が云つた言葉を思ひ出すと支那に爭ひの絶へ間のない理由がはつきりする樣な氣がする。

生命よりも金が欲しい支那の兵隊さんたちは、アノ亡國的なラッパと共に、滿洲の野を行列しながら、矢張り手鼻をかんで居る事だらうか、戰とひつては、そんな悠長な事もなし得ないであらう。

イヤ張作霖が死んだ奉天には、手鼻をかんだ兵隊さん達が、俺こそ支那を併呑する者だ、そんな樣な空想を描きながら、ヤッサモッサと馬力をかけて居る事だらう。

◇